

いろいろな人との出会いに導かれて、親子二代で国際協力に携わる元小児科医

のざき
野崎 いくま
威功真

国際医療協力局
運営企画部・保健医療開発課
医師



★略 歴

- 1993 同志社大学工学部卒業
- 2000 信州大学医学部卒業
- 2000 国立国際医療研究センター 小児科初期研修/後期研修
- 2005 国立国際医療研究センター 国際医療協力局
 - 2007-2010 JICAザンビア HIVケアサービス強化プロジェクト 長期専門家
/保健省ART技術アドバイザー
 - 2010-2011 ハーバード公衆衛生大学院 武見フェロー
 - 2011-2012 厚生労働省 大臣官房国際課出向
 - 2013-2018 JICAミャンマー 主要感染症対策プロジェクト チーフアドバイザー
/感染症対策アドバイザー
 - 2020-現在 JICAカンボジア 保健政策アドバイザー
(2022まで新生児ケアプロジェクトチーフアドバイザーを兼任)

★現在の主な担当業務

- ・JICAカンボジア 保健政策アドバイザー
- ・国際医療開発課（政策貢献、研究支援 他）
- ・グローバルファンド技術審査委員
- ・長崎大学 熱帯医学グローバルヘルス科 客員教授

——— 野崎さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えてください。

私の父は獣医でしたが、栃木県にあるアジア・アフリカの農村指導者を育成するNGO、アジア学院で働いていました。普段からアジアやアフリカからの研修生と触れ合う機会も多かったですし、小学生の時には、父がミャンマーにJICA専門家として2年間赴任したので同行したりしていましたが、子供の頃は自分が開発に関わることになるとは夢にも思っていませんでしたし、むしろ反発する気持ちもあったように覚えています。キリスト教系の高校に進学し、推薦を得て同志社大学に進学した頃には、普通に就職するつもりでいました。

同志社大学時代は学生自治寮に住んだので、社会についていろいろと学ぶ契機にはなりましたが、ヨット同好会に所属したり、バイトしたりと普通の学生生活も楽しんでいました。契機になったのは、アジア学院の主催するインドネシアでのワークキャンプに参加したことです。少し反発すらあったアジア学院の開催するワークキャンプに、なぜ参加しようと思ったのか、当時のことはあまり覚えていないのですが、インドネシアのスマトラ島北部(北スマトラ)で3週間ほどボランティア活動をする大学生向けのワークキャンプに参加することにしました。

自分としては「何か役に立てるのではないか」と思って参加したわけですが、技術も何もっていない学生ができることは、石運びなどの一番簡単な単純作業で、そのくせ一番良いものを食べて、良い場所に泊まっていることに、何か打ちのめされたような感覚を持ったことを覚えています。学生の土木作業チームと別に、医療チームもあって村での診療活動をしていたのですが、これに参加されていたのが、当時、栃木県の栗山村（2006年に旧日光市他1市2町と合併、現日光市）のクリニックで働いていた、現GHIT※1CEO、元グローバルファンド※2戦略局長の国井先生です。何もできない学生には、とても眩しく見えたことを覚えています。（余談ですが、国井先生の奥様はこの時私と一緒に土木作業チームに参加していた学生です。）「いつか自分も役にたきたい」「そのためには何か武器（技術）が必要」と思うようになり、同志社を卒業する頃には、医学部を受け直すことを決めていました。



アジア学院主催のインドネシアでのワークキャンプで
後列左から3人目 野崎医師・前列中央 国井現GHIT CEO



※1 マラリア、結核、顧みられない熱帯病のための、治療薬、ワクチン、診断薬の開発を推進する日本発の国際的な官民ファンド。GHIT Fund ホームページより

※2 和文組織名：世界エイズ・結核・マラリア対策基金 低中所得国の三大疾病対策のために資金を提供する機関として、2002年1月にスイスで設立。国際社会から大規模な資金を調達し、低中所得国が自ら行う三疾病の予防、治療、感染者支援、保健システム強化に資金を提供。支援の対象は、100以上の国・地域にのぼる。年間拠出額は約30億～40億ドル。グローバルファンド日本委員会ホームページより

国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積み重ねていたんですか。

同志社大学卒業後、1年浪人して地方の国立医学部に滑り込みました。国際協力をしたくて医学部を受け直しているの、日本キリスト教海外医療協会 (JOCS) などに所属して、ネパールでの医療実習を行うなど、積極的に取り組んでいました。当時は臨床で国際協力に関わりたいと思っていましたので、専門は内科・外科・産科・小児科から選ぶと思い、最終的に開発途上国で需要が高いと思った小児科を選びました。臨床研修病院は、JOCSの理事をされていた倉辻先生が医長をされていた、国立国際医療研究センター病院 小児科に誘っていただき、試験をつけて入局することができました。以降20年以上にわたって、国立国際医療研究センター一筋です。



学生時代 ネパールで



ネパールの国際NGO病院での実習風景

知らずに入局したのですが、センター病院で研修をうけてよかったことは、新宿にあって社会的背景をもつ患者さんをたくさん診ることができたこと、エイズ治療・研究開発センターがあったので、当時少なかった日本のHIV感染小児の約1/3を診ていたので、HIV診療の経験を積むことができたことなどです。

当時、漫画喫茶のトイレで産み落とされ、低体温で運ばれてきた、院外出生の新生児8例の症例報告を学会にしたことを覚えています。

また、小児科専門医を取得するには、循環器、呼吸器、消化器、腫瘍、新生児など、いろいろな疾患の治療経験があることを提示しなくてはいけないのですが、センター病院では幅広い患者を受け入れていたので、一つの施設で全ての分野の疾患の経験を積むことができました。今でも、その当時の経験が自分の活動の土台になっていると感じています。

特に、当時担当した10歳のHIV患者さんはとても記憶に残っています。母子感染した子で、地方に住んでいて、きちんとした治療をそれまで受けることができていなかったの、センター病院にきた時には、ほとんど免疫がない状態で、普通の人はかからない、カリニ肺炎というカビの肺炎にかかっていました。なんとか肺炎を治療し、HIVの治療も始めました。



国際医療センター（現 国立国際医療研究センター）で臨床医として勤務していたころ

当時、小児向けの剤形があまりなくて、大きなカプセルを飲み込めないと泣く子に、付き合ったのを思い出します。退院後も、起きてすぐだと吐き気で薬が飲めないため、学校に間に合う時間に内服するために毎朝5時に起きていたと言っていました。なんとかHIVの治療もうまくいっていたのですが、合併していたモヤモヤ病で脳出血を起こし、救命することができませんでした。そういう経験もあり、臨床を離れて公衆衛生・国際協力に取り組むようになりましたが、HIV対策支援には、強い思い入れをもっています。

国際医療協力局に入局したきっかけ、理由を教えてください。

小児科で臨床をしていた頃には、国際医療協力への想いは封印し、臨床の技術を磨くことに専念していましたが、後期臨床研修の5年目のときに、国際医療協力局が主催するレジデント研修が開催され、同期のレジデント3人と参加することができました。

当時は、医師が不足している国に赴任し、臨床で国際協力することを思い描いていましたが、別の貢献の仕方があることを研修で学びました。研修が終わる時に、当時、国際医療協力局の課長をされていた仲佐先生に誘っていただき、入局試験を受けて入局しました。その頃の国際医療協力局は、すでに国際協力の経験をもつ海千山千の人たちばかりで、臨床研修を終えたばかりの若輩は珍しく、先輩方にとっても可愛がっていただきました。公衆衛生をイロハから教えていただき、気がつけば20年近くになります。この間、ザンビア、ミャンマー、カンボジアへの長期派遣や、ハーバード公衆衛生大学院への留学、厚生労働省国際課への出向など、いろいろな経験を積ませていただきましたが、離職することなく続けることができたことは、深い理由があって選んだわけではありませんでしたが、肌に合っていたのだと思います。



ザンビアでの結核支援活動



カウンターパートであるミャンマー国立保健研究所のスタッフと（後列右から5番目 野崎医師）



厚生労働省国際課への出向時、WHO世界保健総会に出席

——— 今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

国際医療協力局で経験させていただいた、JICA専門家などの活動は、フィールドレベルのものから、国の政策に関わるもの、グローバルな政策に関わるものなど、多岐・多層にわたります。私はとても気に入っていて、残る人生、一つでも多くの国で活動できるといいと思っています。できれば国際医療協力の現場で一生現役でいられるといいですね。私の年になってくると、健康問題で海外派遣が難しくなるケースもあるようですので、健康管理には気をつけないといけないと思っています。

戦争や紛争、分断、災害など、将来に夢をもちにくい時代になっていますが、それでも明るい未来があることを信じ、自分がその歩みの一つに貢献できることが夢でしょうか？子供たちの世代に、よりよい世界を残すために、なにがしかができるといいと思います。

あと、私は子供が4人いますが、国際医療協力に関心を持ってきている子もいて、親子3代で国際協力というのも、夢でしょうか？

——— 最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

私自身、とても楽しく活動してきましたので、誰にでも勧められるものではないですが、それを目指している人のサポートはしたいと思っています。ただ、向き不向きもありますので、違うなと思ったら、早めの方針転換を勧めます。振り返ってみて、私も自分で道を選んできたというよりも、その時その時に出会いがあって、導かれてきたように感じます。相手の迷惑にはならないよう、自分を律することは重要ですが、肩肘を張らずに飛び込めば、いろいろな出会いが導いてくれるのではないのでしょうか？ 明るい前途を祈念しています。



——— ありがとうございました。